

## 『草堂詩餘』の類書的性格について

藤原 祐子

### 一、はじめに

『草堂詩餘』は、南宋末の編纂に係るとされる唐宋詞の選集本であるが、文学史の上からのみならず、「書籍の出版とその読者」という社会的な観点からも、極めて重要な意味を持つ書籍である。この詞選集は元明期に頻繁に増補改訂が施され、次々に新たな『草堂詩餘』が刊行されたばかりか、それぞれの刊本間の異同も甚だしい。その状況は詩選集でいえば『千家詩』と類似しており、原形はおるか版本の系統すらにわかに定めがたい。唐宋詞各作品のテキスト流伝の原形を探る上では必ずしも「使い勝手」のよい書籍とは言えないだろう。だが、『草堂詩餘』のこの「使い勝手」の悪さは、実は『草堂詩餘』のかつての「使われ方」を物語っている。『草堂詩餘』は、かつては最も「使い勝手」のよい詞選集だったのではないか。そうであったからこそ、何度も増補改訂され、新しい刊本が次々と世に送り出されることになった。その流布と浸透を証明するかの如く、明清期の詞話には『草堂詩餘』

に言及するものが少なくない。同じ南宋期に編纂された詞選集には他に『樂府雅詞』『花庵詞選』などもあるが、版本の量、言及の数のいずれにおいても、『草堂詩餘』には遠く及ばない<sup>①</sup>。そこで、本論に入る前にまず『草堂詩餘』の概略を述べておこう。

『草堂詩餘』の主な刊本については、中田勇次郎氏にすでに詳細な考察がある<sup>②</sup>。それによると、『草堂詩餘』の最も早い刊本は南宋寧宗期には存在していたと考えられるが、残念ながら現存しない<sup>③</sup>。『草堂詩餘』の諸刊本は、大きく分けて、四季雜題に配列された「分類本」と呼ばれるものと、詞の長短及び詞牌別に配列された「分調本」と呼ばれるものの二系統がある。分類本の体例は、六朝唐代以来の類書類（天・歳時に始まり花木鳥獸に終わる）や歳時記類（上元・寒食といった節序の分類）に範を得ていると考えられ、さらに詞註と詞話を伴っている点の特徴である。分調本は詞を字数の多少によつて「小令」「中調」「長調」の三種に分かつて編纂し、詞註や詞話を附さないものも多い。

分類本と分調本それぞれの成立の先後については、王国維（『王觀堂先生全集』冊四「庚辛之間讀書記」）・趙万里（『校輯宋金元人詞』引用書目）両氏に既に考察があり、その見解は以下の三点にまとめることができる。

- ①分調本が附する小題は分類本の子目と一致する。
- ②分類本は撰者不明の場合はその名を書き入れる場所を空けてあるが、分調本は分類本がその前の詞に記す撰人をもそのまま当てて撰者としている。

③分調の方式は他に範とすべき文献がない。

結論としては、分類本を詞牌ごとに配列し直したものが分調本なのであり、つまり版本としての起源は分類本のほうが古いということになる。この見解については中田氏も賛同の意を示されており、筆者も同様に考える。

分類本系統の刊本をみてみると、現存では元朝期のものが早い。筆者は、現存で最も古いとされる京都大学所蔵(狩野博士旧蔵本)至正三年刊本をはじめ、明洪武二十五年遵正書堂刊本(『統修四庫全書』所収)、明嘉靖中安肅荆聚刊本(『四部叢刊』所収)を見たほか、村上哲見先生のご厚意により、明嘉靖二十八年李謹輯刊本、明万曆四十二年顧從敬編刊本(ともに東洋文庫蔵、ただし顧本は分調本)を、参照させて頂いた。それら古い刊本は、それぞれに細かな異同はあるものの、体例・収録作品・詞註・詞話といった要素は、古いものから新しいものへとそのまま踏襲されていると言つてよいように思われる。『草堂詩餘』の版本としての原形はもちろんわからないものの、元朝期から明初にかけては共通の詞註・詞話等が「分類本」の形で継承され続け、「分調本」とはそうして継承された作品群が詞牌による「檢索」、つまり一種の詞譜としての利用が可能ないように並べ替えられたものだったのである。

本稿の目的は、『草堂詩餘』の比較的古い分類本系統の刊本の中に、「読む書物」であるよりも「引かれる書物」、すなわち「類書」としての性格を探るものである。すなわち、文学論の立場から一首一首の詞が選択されて配列された詞華集として『草堂詩餘』を見るよりも、むしろ羅列・網羅を目指して編まれた詞選集と見る。そしてこの意味で、『草堂詩餘』を「類書」であると考え。以下の論述に於いては、筆者が目撃し得た刊本のうち、最も完備した明洪武二十五年遵正書堂刊本を底本とする。⑤では、『草堂詩餘』がいかに「類書」であったかということについて、その収録される詞と詞註、詞話の各方面から、アプローチを試みたい。

## 二、収録される詞

『草堂詩餘』は、まずなにより「雑多」な詞選集であり、その網羅的という面からすれば「類書」といつても

よい特徴を持つ。その雑多さは、収録される詞に端的に見ることができ、たとえば他の詞選集が掲載しない無名氏や無名詞人の作品を多く収録する。分類本には作者名が記されていない詞がままあり、来歴がよく分からない作品も多い。

『草堂詩餘』のみが収録する作品にはどのようなものがあるのだろうか。まず、無名氏の作品について見てみよう。『草堂詩餘』は、『全宋詞』などの整理によっても作者を特定できず、無名氏とされている作品を四十餘首収録する。それを含めた『草堂詩餘』に収録される作品群が、いかなる性格を有するかについては、朱彝尊が『樂府雅詞』の跋文として書いた次の文章（『曝書亭集』卷四十三）を読めば明らかだろう。

長短句を作りて必ず「雅詞」と曰うは、蓋し、詞は雅を以て尚しと為すならん。是の編（『樂府雅詞』）を得ば、『草堂詩餘』は廢すべし。

朱彝尊が『草堂詩餘』と対照して評価した『樂府雅詞』は、南宋期に曾慥が編纂した詞のアンソロジーで、『草堂詩餘』と同様に無名氏の作品を少なからず収める。『樂府雅詞』は、曾慥が「引」の中で「諧謔に渉るは則ち之を去る。……当時の小人、或いは艶曲を作り、謬りて公（歐陽脩）の詞と為す。今、悉く削除す」と述べるように、彼が集め得た詞の中から「諧謔」と「艶曲」をのぞき、また無名氏の作品については、「此の外、又た百餘闕有り、平日人口に膾炙するも、咸な姓名を知らず。則ち卷末に類して以て詢訪を俟つ。拾遺と標目するなり」というように、「人口に膾炙」した「雅詞」を残して卷末にまとめたものであった（巻首にも【九張機】など無名氏の重要な作品がある）。『樂府雅詞』のみが収める無名氏作品は六十餘首の多きにのぼるが、それらはすべて曾慥の観点から取捨選択された「雅詞」といえる。朱彝尊は、それら無名氏の作品も含めて「是の編を得ば、『草堂詩餘』は廢すべし」と述べたはずであろう。しかし、朱彝尊が『樂府雅詞』の跋文を書いて『草堂詩餘』に言及せざるを得なかつたように、詞選集

として実際に読まれていたのは『楽府雅詞』ではなく『草堂詩餘』であった。

では、具体的に『草堂詩餘』にはどのような無名氏作品が収録されているのだろうか。例えば次の作品を見てみよう。

枝上流鶯和淚聞。新啼痕間旧啼痕。一春魚鳥無消息、千里関山勞夢魂。○無一語、对芳樽。安排腸斷到黄昏。甫能灸得灯兒了、雨打梨花深閉門。

枝の上で啼く鶯の声を涙とともに聞く。新しい涙の痕の間には旧い涙の痕が残る。この春も便りはなかった、夢の中で千里の山の彼方まで徒らに心を馳せるだけ。○言葉もなく、独りで美酒の前に。悲しみだけを準備して夕方まで過ごす。やっと灯りをともして火も消えたと思ったら。外では雨が梨花を打ち門は固く閉ざされたまま。

(前集卷下／【鷓鴣天】<sup>⑥</sup>)

この詞には詞話が附されており、『古今詞話』に「此の詞、愁怨の意を形容するに最も工なり。後晝の『甫能灸得灯兒了、雨打梨花深閉門』の如きは頓る言外の意有り」とある」というように、女性の閨怨の情を詠った佳作と評価されている<sup>⑦</sup>。

また、次のような作品もある。

楊柳絲絲弄輕柔。煙縷織成愁。海棠未雨、梨花先雪、一半春休。○而今往事難重省、歸夢遶秦樓。相思只在丁香枝上、豆蔻梢頭。

柳が糸のようにふわふわと空中に漂う。たなびく煙のような柳の枝は解けることない愁いのようにもつれ合う。海棠はまだ雨に濡れたように艶やかな花を咲かせないが、梨はもう雪のように白い花を散らし始め、春は半ばを過ぎてしまった。○今となつては往事の意味は悟り得ぬ、ただ夢の中でかの秦楼へと帰っていく。丁香の枝や豆

蕊の梢を見るにつけ、恋心は湧き上がる。

(前集卷上／【眼兒媚】)

恋人と別れて久しい主人公が、春の景色に触発されて相手を思い出し感傷に浸る。表面的には春の景色のみを詠じ、相手の存在は「秦楼」「丁香」「豆蔻」等の語で暗示するのみである<sup>⑤</sup>。この詞は、清・黃氏『蓼園詞評』に「語清新婉情なり、後人鮮を争い艶を鬥わすも、終に及ぶ能わず、數百年來、脱かた口りて新たなるが如し」との評がある。二首とも、特に深みのある作品とはいえないかもしれないが、「諧謔」「艷曲」というわけでもない。評にもあるとおり、ある程度の水準は有した作品とすべきだろう。朱彝尊は『草堂詩餘』を「雅詞」とするには足らぬ詞選集だと認識していたが、彼がこれらの作品を知り得たのも、『草堂詩餘』が様々な作品を「類書」に集めてくれたおかげなのである。

なお、『草堂詩餘』が収める無名氏作品四十餘首のうち『樂府雅詞』と共通するのはわずかに四首にすぎない。この事實は、両書の採録基準が異なるがゆえに、『草堂詩餘』のみが伝え得た作品も決して少なくなかったことを意味する。また、『樂府雅詞』が無名氏の作品を含む百餘首を「拾遺」という形で別立てて収録するのに対し、『草堂詩餘』は無名氏と有名な詞人の別なく収録しているのも、大きな特徴といえる。

次に、作者同定が可能ではあるが、別集や他の詞選集には見えない作品を示してみよう。

【武陵春】李清照(前集卷上)／【念奴嬌】僧仲殊・【夏初臨】劉巨濟(前集卷下)／【絳都春】丁仙現・【万年歡】胡浩然・【女冠子】李漢老・【賀新郎】劉方叔・【金菊對芙蓉】辛幼安・【東風齊着力】胡浩然・【送入我門來】胡浩然・【念奴嬌】范元卿・【念奴嬌】姚孝寧・【念奴嬌】韓子蒼・【春霽】胡浩然(後集卷上)／【小冲山】宋豐之・【念奴嬌】朱敦儒・【滿江紅】康与之(後集卷下)

このうち、特徴的と思われる人物を少し詳しくみることにする。

まず、【絳都春】の丁仙現は『東京夢華錄』や『夢梁錄』などにその名がみえ、それらの記述によると彼は熙寧年間に教坊大使の地位にあった俳優で、音楽と演技にかけての大立者であったという。<sup>⑤</sup>【絳都春】は上元の都城の様子を詠じており、『蓼園詞評』に「都城宮禁の夕放灯の光景を写す、麗にして泛ならず、穠にして俗ならず、合作なり」との評がある。

この詞は、汲古閣六十名家詞『吳夢窓詞』と『御選歷代詩餘』巻七十が呉文英の作品として収録するほか、清・曹元忠『補樂章集』にも柳永の作品として収録される。呉文英の詞と誤られた絳緯は不明であるが、柳永の作品と誤られたのは、あるいは『草堂詩餘』がこの詞を柳永【傾盃盃（禁漏花深）】の後に置くことと関係があるかもしれない。柳永も呉文英も詞の世界では極めて重要且つ有名な作者である。誤りとはいえ彼らの別集に混入されたということは、丁仙現のこの詞がいかに広く読まれ、高く評価されていたかを物語るだろう。しかも、この詞を収めるのは『草堂詩餘』が最も早いのであるから、毛晋や曹元忠は『草堂詩餘』の刊本のいずれかを通してこの詞を知った可能性もある。

次に胡浩然であるが、彼についてはそもそもいかなる人物であるかが未詳である。『全宋詞』も名前を挙げるのみで小伝を載せない。しかし、その詞は明清の詞話類に度々引用され、作品に対する評価は必ずしも低くはない。例えば清・沈雄は『古今詞話』「詞評」上巻「胡浩然」の条で「選詞家は俱に甚だ其の声口を薄うすんじ、但だ其の【春霽】【秋霽】【万年歡】【東風齊着力】【送入我門來】に就きては、俱に其の庸を以て諸を忽せにし、殊に知らず、穩貼なる者に亦た佳処有るを。……其の情、人の致さざる所に到る。亦た何ぞ庸過にて之を斥けんや」という。また、沈雄が胡浩然の作品として列挙している【秋霽】の詞について、『草堂詩餘』は作者を「陳後主」に作っており、その正誤を巡っては明・楊慎『詞品』巻二に以下のような考察が見える。

草堂詞選、【春霽】【秋霽】の二首相連なる。皆な浩浩然の作なり。格韻一なるが如くして、尾句皆な是れ「有誰知得」なり。而るに何等の妄人、【秋霽】の下に陳後主の名を添入せしかを知らず。

楊慎は、【春霽】との格律及び末句の類似から、【秋霽】も浩浩然の作であることは明らかであるといい、さらにこの後に続けて、六朝に慢詞があつたはずは無く、王勃の「滕王閣序」の語句を襲用していることから陳後主の作ではあり得ないと考察する。また『全宋詞』が録する浩浩然の作五首は、その全てを『草堂詩餘』に負っており、もし『草堂詩餘』が彼の詞を収録しなければ、その存在が後世に知られることはなかつたかもしれない。楊慎は右の考察の中で「草堂詞選」と記しているが、このことは単に楊慎自身が浩浩然の作品を『草堂詩餘』から知つたというだけではなく、それら五首が『草堂詩餘』によつて伝えられたことを示唆するのではあるまいか。

このほか、姚孝寧は宣和年間の太学生であつたといふことしか明らかでなく、宋豊之はその経歴が全くの不明である。劉巨濟と韓子蒼は『宋史』に伝を有し、范元卿及び劉方叔も経歴はある程度知られるが、現存作品のほとんどを『草堂詩餘』に負う。<sup>12)</sup>

以上のように、明清の詞家は『草堂詩餘』によつて無名詞人の作品を知り、また逆に言えば、無名詞人の作品は『草堂詩餘』が収録していたことで後世に伝えられた可能性が高いのである。

では、他の詞選集も収録するような有名詞人とその作品についてもみてみよう。ここでは本稿が底本とした『草堂詩餘』が明らかに参照したと思われる『花庵詞選』を取り上げ、比較を行う。<sup>13)</sup>

『花庵詞選』が収録する詞人と作品のうち、『草堂詩餘』と共通するのは九十二人、約二百首である。これは『草堂詩餘』が収録する作品総数のおよそ三分の二を占めるのだが、この両書の間にはやはり大きな差異が存在する。

その差異はまず、収録作品数上位に入る詞人の比較によつて確認できる。『草堂詩餘』の上位は周邦彦の五十首

に始まり、以下蘇軾二十六首、秦觀十九首、柳永十五首と続き、『花庵詞選』は辛棄疾及び劉克莊の四十二首同数一位に始まり、以下黃昇の三十八首、蘇軾の三十一首と続く。つまり、『花庵詞選』が上位に置く人物が『草堂詩餘』でも上位を占めるとは限らないのである。『花庵詞選』における黄昇の立場はいささか特殊であるのでひとまず措くが、辛棄疾及び劉克莊については、『草堂詩餘』はそれぞれわずかに十首と一首を収めるに止まる。また逆に、『草堂詩餘』が多く収録する柳永や秦觀は、『花庵詞選』も十一首、十六首と、数の上では拮抗するものの、全体における比率では明らかに低い。

次に、収録される作品にも明らかな差異が確認できる。例えば蘇軾は『花庵詞選』の方が五首多く収録し、共通するのは十四首。総数三十一首のおよそ半分は過ぎない。また柳永は蘇軾とは逆に『草堂詩餘』の方が四首多いが、共通するのはわずか三首に止まる。さらに、黄庭堅は『花庵詞選』九首、『草堂詩餘』八首とほぼ同数だが、そのうち三首を共有するのみであるし、周邦彦と秦觀は『草堂詩餘』のほうが収録数は遥かに多いにもかかわらず、『花庵詞選』の収録する詞を全て収めるわけではない。

これは実は非常に興味深い傾向といえる。先行選集を参照して新たな選集を編纂する場合、それをそのまま踏襲するか或いはそれが収める作品を避けようとするか、このどちらかの傾向が現れることが多い。ところが『草堂詩餘』は、『花庵詞選』の収録作品を全て採録するわけでもなく、また避けているわけでもない。

また、その採録する詞については以下のような批評がある。

○東坡云わく：「人びと皆言う柳耆卿の詞は俗なりと。『霜風凄緊、関河冷落、残照当楼』の如きは、唐人の佳処も此くの如きを過らず」と。……蓋し【八声甘州】なり。『草堂（詩餘）』此を選ばず。而して其の「願奴  
奶蘭心蕙性（玉女攝仙佩）」の鄙俗、「以文会友（女冠子）」、「寡信輕諾（尾犯）」の酸文の如きを選ばず、何

の見たるかを知らず。

(明・楊慎『詞品』卷三「柳詞為東坡所賞」)

○従来佳処の伝わらざるは、但だに隱鱗の士のみならず、名人も猶お此の憾えらみを抱くなり。周清真は人の共に称する所なり。然も「乳鴨池塘水暖……簾影參差滿院(秋蕊香)」の如きあるも、『草堂(詩餘)』の収める所の周詞は、此れに及ばざる者多し。

(清・賀裳『皺水軒詞筌』「草堂未收清真佳詞」)

○【鷓鴣天】は最も佳辞多し。『草堂(詩餘)』の載せる所は、一つとして善き者無し。……駸駸として詩人の致有るも、選は之に及ばざるは、何ぞや。

(同右「草堂選鷓鴣天不佳」)

『草堂詩餘』は「佳」「善」な作品を選んでいない、というのが彼らの主張である。しかし、全体を見渡した場合、『樂府雅詞』や『花庵詞選』も収録するような、「佳」「善」と評価される詞も実は多く収録しているのであり、その意味においては彼らの言は偏ったものと言わざるを得まい。

とはいえ、『花庵詞選』と『草堂詩餘』とで収録する作品が大きく異なるのは事実である。無名氏に帰せられる作品を一首も収めないことに象徴されるように、『花庵詞選』には来歴確かな「諸賢」の「絶妙」な作品を選ぶという姿勢が見いだせる。<sup>16)</sup>『花庵詞選』は作者別という体例のみならず、内容においても正統な詞華集ということが出来るだろう。それに対して『草堂詩餘』は「佳」「善」と「鄙俗」「酸文」が無秩序に混ざり合つて収録されている。あるいは独自の編集方針があり、それに沿つた選択が行われているのかもしれないが、その編集方針は少なくとも今日の我々からは必ずしも明確ではない。『草堂詩餘』は、中田氏が言うように「季節・自然に対する豊かな感覚」をもつた「最も洗練された」詞選集というよりはむしろ、類書網羅を目指した結果としての雑多さをもつ詞選集とみるべきではあるまいか。

### 三、詞註及び詞話

『草堂詩餘』の「類書的」な性格は、収録作品以外にも見出すことができる。一つは詞註、もう一つは詞話である。まず詞註から見よう。註を有する詞集には、宋・陳元龍『詳註周美成詞片玉集』（『統修四庫全書』所収宋版の影印を参照した。以下陳註）及び宋・傅幹『注坡詞』（劉尚榮校証『傅幹注坡詞』（巴蜀書社、一九九三年）を参照した。以下傅註）などが先行例として見えるが、『花間集』『樂府雅詞』『花庵詞選』などのアンソロジーにおいては、詞人の小伝や詞評をわずかに書き加えることがあるにすぎない。つまり、『草堂詩餘』のように註が附されるということ自体が詞の選集においては異例なのである。中田氏は、洪武本の註は編者自らが施したものの他に、例えば周邦彦の詞には陳註、蘇軾の詞には傅註といった、他書の註がほぼそのまま用いられていると言う。このように註を他書から借用して踏襲するという姿勢自体は、注釈の付け方として珍しいものではないが、その借用の仕方によれば無定見な態度がみられる。

では、具体的にどのような註が施されているのだろうか。ここでは詞集としての体例の類似性を考慮して陳註を取り上げ、比較してみよう。次に『草堂詩餘』の本文を註も含めてそのまま引用する。

章台路。漢書張敞走馬於章台街下即路也還是褪粉梅梢、試花桃樹。惜惜坊陌人家、定巢燕子、歸來旧處。柳惲詩玉戶夜惜惜杜詩頻來語燕定新巢○黯凝竚。因念箇人痴小、乍窺門戶。蘇子美常云痴小失所記倚柱惜惜更有情侵晨淺約宮黃、障風映袖、盈盈笑語。李賀詩宮人面靨黃梁簡文詩約黃能効月○前度劉郎重到、唐劉禹錫集云自朗州承召過玄都觀後復主客郎中重遊玄都唯見兔葵燕麥動搖春風耳再題詩云種桃道士知何處前度劉郎今獨來訪鄰尋里、同時歌舞。惟有旧家秋娘、声價如故。杜牧杜秋娘詩尊杜秋

有寵景陵後賜歸鄉予過金陵感其旧且老因為之賦詩吟賤賦筆、猶記燕台句。李義山詩序柳枝洛中里娘也年十七塗粧縮髻未嘗竟已余從昆讓山比柳枝居他日春陰讓山詠二燕台詩柳枝問曰誰人為是讓山曰此吾少年叔耳柳枝乃手斷其帶結讓山為贈叔之詩明日余策馬出其巷柳枝鬢靛粧抱立扇下風障一袖指曰若叔何深望之願与郎俱余因諾之後不果留但恨望耳有詩云長吟遠下燕台句惟有花香染未消知誰伴、名園露飲、東城閑步。杜詩名園依綠水筆談石曼卿露頂而飲杜牧佐沈傅師幕在江西時張好好以善歌入籍一年鎮宣城復置好好宣籍又二年沈著作以雙鬢納之又二年往東城縱步復見之事与孤鴻去。杜牧詩恨如春草多事逐孤鴻去探春尽是傷離緒。官柳低金縷。杜甫詩官柳着行新溫庭筠詩

不似垂楊惜金縷歸騎晚、織織池塘飛雨。斷腸院落、一簾風絮。張景陽詩飛雨灑朝蘭晏元獻詩梨花院落溶溶月柳絮池塘淡淡風

章台の道で。再び桃色の褪せた梅の梢や、ちよつと花が咲きかけた桃の木を見ることになった。静かな竹まいの治道の人家では、毎年巢を作る燕が、今年もなじみの場所に帰ってきた。○ふと立ちつくす。かつてあの人があどけなくも、ちらつと扉から顔を出して私の方を窺っていたものだ。早朝には薄化粧をし、衝立に隠れて袖で顔を覆いつつ、恥ずかしげに笑い語りかけてくれた。○再び此処にやってきた、街のあちこちで、あの頃の歌や舞を探したが。ただかつての秋娘が、当時と変わらぬ評判を得ているだけであった。彼女は私が作り紙に書き留めた、燕台の句を覚えてくれていた。あの人は一体誰と、名園に露座して宴会し、街の東を散歩しているのだろうか。過去はみな一羽の鴻と共に去ってしまった。春景色を求め出かけてみたところで何もかもがこの心を悲しませる。柳は金の綿毛を低く垂れている。帰ってくるのが遅かったのだ、小雨が池に降り注ぐ中。中庭には柳の綿が簾のように一面に飛び交い、寂しさを思い知るばかり。

(前集卷上／【瑞龍吟】<sup>⑩</sup>)

『草堂詩餘』及び陳註の冒頭を飾る周邦彦の代表作である。ごく一部の文字の異同を除いて、『草堂詩餘』は極めて忠実に陳註を襲う。その証拠となる註をいくつか取り出してみよう。

○漢書「張敞走馬於章台街下」即路也。

○柳惲詩「玉戸夜惜惜」

○李賀詩「宮人面黳黃」

これらは陳註と完全に一致し、一字の異同もない。まず『漢書』の引用(卷七十六「張敞伝」)であるが、本来の記述を大幅に節略しているうえに、「即路也」の語は見えない。すなわち『草堂詩餘』は、陳註が『漢書』の記述を節略し按語を附したものをそのまま襲用したと考えざるをえない。柳惲詩と李賀詩についても、現存通行本がそれぞれ「玉壺」「正」と作る文字を、陳註がすでに「玉戸」「面」に作っており、『草堂詩餘』は明らかにその陳註の文字を襲っている。

更に明確な例としては「李義山詩序」で始まる一文、すなわち李商隱「柳枝五首自序」の引用が挙げられる。まず、李商隱の自序本文を該当箇所を中心に引いてみよう。<sup>8)</sup>

柳枝、洛中里娘也。……生十七年、塗妝縮髻、未嘗竟、已復起去、……余從昆讓山、比柳枝居為近。他日春曾陰、讓山下馬柳枝南柳下、詠余燕台詩。柳枝驚問、誰人有此、誰人為是。讓山謂曰、此吾里中少年叔耳。柳枝手斷長帶、結讓山為贈叔乞詩。明日、余比馬出其巷、柳枝丫鬢畢妝、抱立扇下、風幘一袖、指曰、若叔是、後三日、鄰當去濺裙水上、以博山香待、与郎俱過。余諾之。会所友有偕當詣京師者、戲盜余臥裝以先、不果留。……因寓詩以墨其故処云。

これに対し、陳註は以下のように作る。

柳枝、洛中里娘也。年十七、塗粧縮髻、未嘗竟。已余從昆讓山比柳枝居。他日春陰、讓山詠二燕台詩。柳枝問曰、誰人為是。讓山曰、此吾少年叔耳。柳枝乃手斷其帶、結讓山為贈叔乞詩。明日余策馬出其巷、柳枝丫鬢靚粧、抱立扇下、風障一袖、指曰、若叔何深望之、願与郎俱。余因諾之、後不果留、但悵望耳。

現存通行本の自序とかかなりの異同があり、また『草堂詩餘』の記述と全く同じであることは一目瞭然であろう。陳註の記述は自序の抜粋であり、しかもその中に自序にはない語が多く含まれている。つまり、『草堂詩餘』が陳註を参照しないかぎり、このような合致を見ることは不可能なのである。

【瑞龍吟】はかなり極端な借用・踏襲の例であるが、『草堂詩餘』の註が陳註のそれをほぼ丸ごと襲う例は、収録される周邦彦詞の半数以上を占める。中田氏のいうように、『草堂詩餘』がその収録にあたって陳註を参照していたことは確実といえるだろう。

ところが一方で、陳註が施した註を『草堂詩餘』が大幅に削除する例も、全体の約三分の一を数える。

露迷衰草。踈星掛、王荊公詞但衰草寒煙疑綠涼蟾低下林表。素娥青女闌嬋娟、李商隱詩青女素娥俱耐冷月中霜裏闌嬋娟正倍添悽悄。漸颯颯、丹楓撼曉。唐詩曉霜楓葉丹橫天雲浪魚鱗小。白樂天伊水細浪鱗甲見皓月相看、又透入、清輝半餉、特地留照。○迢遞望極関山、波穿千里、度日如歲難到。鳳樓今夜聽西風、奈五更愁抱。想玉匣哀絃閉了。無心重理相思調。念故人、牽離恨、屏掩孤蟾、淚流多少。

露にけぶる枯れ草。疎らに星が輝き、冷たい月が林の向こうに落ちようとしている。月と霜とが美しさを競い凄然たる気持ちを増すばかり。さわさわと、赤い楓が暁を告げる。空には魚の鱗のような雲が横たわる。白い月を見やれば、清い輝きが差し込んできて、わざと長く留まっているようだ。○遠くを望めばはるかな山は、波のように千里に連なり、一日は一年のように長く感じられる。鳳樓で今夜西風を聴いた、五更の愁いをどうしようもない。琴を玉の箱に収めてしまおうとするのは。知らず知らずにまた恋愛の調べを奏でてしまうから。あの人を想って離れ離れの恨みに取り憑かれ、屏風の影で私は独り、どれほどの涙を流したことだろう。

(前集巻下／【霜葉飛】)

この詞において陳註を留めるのは、「李商隱詩『青女素娥俱耐冷、月中霜裏鬪嬋娟』<sup>⑧</sup>」と「唐詩『曉霜楓葉丹』<sup>⑨</sup>」のみである。また後関には註が一切附されていないが、もちろん陳註が後関には註を附していないというわけではなく、『草堂詩餘』が全てを削除しているのである。では『草堂詩餘』はなぜ右の二つを残し、それ以外を削除したのだろうか。削除された陳註を以下に列举してみよう。なお、「」内は註が附される語である。

〔清輝〕 顏延年云「清暉在天、容光必照」

〔留照〕 沈警感異記「將別女郎曰『姮娥妬人不肯留照、織女無賴已復斜河』」<sup>⑩</sup>

〔半餉〕 半餉言半飯之久也。

〔関山〕 江淹恨賦云「関山無極」

〔度日如歲〕 毛詩云「一日不見、如三秋兮」

〔鳳樓〕 幽冥錄曰「鄴城五層樓、安金鳳凰二頭其上」<sup>⑪</sup>

〔聽西風〕 白氏六帖云「聽秋風於静室」

〔玉匣〕 孟東野云「玉匣五絃在、請君時一鳴」

〔哀絃〕 杜甫詩「哀絃繞白雪」

〔相思調〕 陶穀詞云「琵琶撥尽相思調」

〔屏掩〕 李嶠詩「思婦屏輝掩」

これらのうち、例えば「度日如歲」の註は典故として正しく（この詞は「秋景」に分類されているため、同じ『毛詩』の「一日不見如三歲」を引くよりも適切な註といえるかもしれない）、「玉匣」の句は恐らく孟郊のこの詩を踏まえているのだろう。<sup>⑫</sup> また「関山」や「屏掩」の註も、この詞を解釈するに有用であるといえる。つまり、『草堂詩餘』が留める二つの

註と比べて、これらの註が特に遜色あるわけではない。李商隱の句ではなく『毛詩』の句が、あるいは唐詩ではなく江淹の句が留められていても、なんら不自然ではなかったはずなのだ。

さらに興味深いのは、『草堂詩餘』は有用な註を削除する一方で、陳註が註を附さない語に註を附したり、陳註を削除して別の用例を引用したりする箇所があるということである。前者の例は「衰草」の語註で、註にいう「王荊公詞『但衰草寒煙疑綠』」は恐らく王安石【桂枝香】詞の一句「但寒煙芳草凝綠」と思われるが、引用には誤りがある。後者の例は「魚鱗」の語註で、両書の引用はそれぞれ次のようである。

〈草堂〉白樂天「伊水細浪鱗甲」

〈陳註〉呂氏春秋云「山雲草莽、水雲魚鱗、旱雲煙火、雨雲水波」

本文「横天雲浪魚鱗小」にいう「魚鱗」は月光に照らし出される夜の雲である。しかし、『草堂詩餘』が引く白樂天詩は「嵩峯餘霞錦綺卷、伊水細浪鱗甲生」（『白氏長慶集』卷二十九「秋日与張賓客……」詩）といい、そこにいう「鱗甲」は嵩山を背景とした昼の伊水に立つ細かなさざ波である。つまり、周邦彦の詞句と白樂天の詩句の間には何の関連もないのだが、『草堂詩餘』の編者はただ「鱗」という同じ文字に引かれ、その単語と文意を確認することなく註として附しているのである。

『草堂詩餘』と陳註の違いが顕著な例を、もう一つ見ておこう。

新簾搖動翠葆。唐儀衛志天子有羽葆華蓋曲径通深窈。唐詩竹徑通幽処夏果収新脆、金丸落、飛鳥。李賀嘲年少皆把金丸落飛

鳥濃靄迷岸草。蛙声鬧。驟雨鳴池沼。杜詩驟雨落河魚水亭小。韓愈詩空涼水上亭○浮萍破処、簾花簾影顛倒。杜詩灯前

細雨簷花落綸巾羽扇、晋謝万常着白綸巾見簡文帝又晋志顧榮伐陳敏以白羽扇揮之賊衆大敗醉臥北窓清曉。晋陶淵明為彭沢令解印綬賦

歸去來嘗言夏月虛閑高臥北窓之下清風颯至自謂羲皇上人屏裏吳山夢柯到。驚覺。依前身。在江表。後秦王猛謂符堅曰謝安桓中皆江

表偉人

新竹が翠の羽根飾りのように揺れている。曲がりくねった道が竹林の奥深くへと続いていく。夏の果物は実ったばかりでみずみずしく、金色の実が落ちては、飛ぶ鳥を驚かせている。濃いもやにけぶる岸辺の草。蛙の鳴き声も騒がしい。にわか雨が池の水面を打つ。水際の小さな四阿あずまや。○浮き草が途切れる処には、軒端に咲く花や簾の影が逆さまに映る。繻子のかぶりものと羽扇を手に、酔って北の窓辺で寝転がったまま清しい朝を迎える。夢の中では屏風に描かれたあの呉山に到ったが。目が覚めてみれば。そこはやはり江南の地。

(前集巻下【隔浦蓮】<sup>⑤</sup>)

陳註と比較してみよう。まず一つ目、「翠葆」の註。

〈草堂〉唐儀衛志「天子有羽葆華蓋」

〈陳註〉謝朓詩「翠葆隨風、金戈動日」五采羽名為葆。<sup>⑦</sup>言新竹如此。

『草堂詩餘』が引くのは『新唐書』卷二十三「儀衛志」(上)に「唐制、天子の居るを『衛』と曰い、行くを『駕』と曰う、皆な衛の有嚴なる有り。羽葆、華蓋、旌旗、罕畢、車馬の衆、盛んなるかな、皆な安徐として謹しからず」とあるものだが、そこに用いられるのは「羽葆」という類似はするが別の語であり、内容的にも本文との関連を認めにくい。また、『唐書』『儀衛志』のような典拠は、宋代に成立した『錦繡万花谷』や『記纂淵海』といった類書類にしばしば見られることも注意すべきだろう。対して、陳註が引く謝朓詩は「翠葆」という語がそのまま見えるだけでなく、「隨風」の語が含まれるのはおそらく本文に「揺動」というのを承けてのものであって、それが一句全体の解釈の助けともなる。

後文の「曲徑」「簷花」の註にも同様の事がいえる。

○〈草堂〉唐詩「竹徑通幽処」

〈陳註〉杜甫詩「小徑曲通村」

○〈草堂〉杜詩「灯前細雨簷花落」

〈陳註〉張子野詩「浮萍破処見山影」杜甫詩云「簷影微微落」

陳註がすでに、註としての射たものを附しているにも関わらず、『草堂詩餘』はわざわざ別の用例を引く。しかも、「竹徑通幽処」は『冷齋夜話』卷三が「唐詩」として載せ、また杜詩「灯前細雨簷花落」は宋・胡仔『漁隱叢話』前集卷五十九に「周美成『水亭小。浮萍破処、簷花簾影顛倒』、按ずるに杜少陵詩『灯前細雨簷花落』あり、美成は此の『簷花』二字を用うるも、全く出処と意相合わず。乃ち用字の難きを知れり」とあり、周邦彦の用字に対する批判として既に用いられている。後に詳述するが、『草堂詩餘』の編者は編纂にあたって『漁隱叢話』を参照しており、杜詩についてはあるいはこの記述に引かれて、その内容を吟味することなく安易に註として附した可能性もあるだろう。<sup>※</sup>なお、『草堂詩餘』に引かれる「唐詩」は『錦繡万花谷』後集卷二十八にも収録され、「杜詩」は『記纂淵海』卷二にも収録される。

註としての違いが最も顕著なのは、最後の「江表」の註であろう。

〈草堂〉後秦王猛謂符堅曰「謝安桓中皆江表偉人」。

〈陳註〉温庭筠詩「屏上吳山遠、樓中朔管悲」江表言江南也。

陳註の的確な用例及び明瞭な按語と比較して、『草堂詩餘』の註は詞の内容との関連が薄いだけでなく誤りが非常に多い。『晋書』や『資治通鑑』などの史書に拠ると、時代は「後秦」ではなく「晋」、符堅に対してこの言葉を使ったのは王猛ではなく権翼である。また「桓中」も「桓沖」につくるのが正しい。これらの誤りを総合するに、

史書以外の、何らかの混乱を含む記述（例えば類書や筆記等）からの借用である可能性が高いだろう。

陳註で附されない箇所（例）に附された註としては、「杜詩『驟雨落河魚』」「韓愈詩『空涼水上亭』」「晋志『顧榮伐陳敏、以白羽扇揮之、賊衆大敗』」があるが、これらは詞の解釈上必ずしも必要なものとも思えない。詩二首はただ同じ語彙が用いられているにすぎないし、「晋志」の引用は注釈として不適切と思われるだけでなく、『晋書』の記述と比較すると文章に大幅な異同が認められる。<sup>23)</sup>

もちろん、この詞に限って陳註を参照していないということは考えられないのであって、例えば「綸巾」の註には陳註を参照した形跡が認められる。

〈草堂〉晋謝万、常着白綸巾見簡文帝。

〈陳註〉世説云「謝万、謁簡文帝著白綸巾」<sup>24)</sup>

『草堂詩餘』と陳註の引用は、語順語彙に異同はあるが内容はほぼ一致する。ところが、『世説新語』を見ると謝万が「白綸巾」を着けてまみえたのは妻の父王藍田であり、簡文帝ではない。<sup>25)</sup> 陳註の記述が何に基づくかは不明だが、少なくとも同じ間違いを『草堂詩餘』も踏襲している。また「李賀嘲年少『皆把金丸落飛鳥』」「晋陶淵明、為彭沢令、解印綬、賦歸去來。嘗言夏月虛閑、高臥北窓之下、清風颯至、自謂羲皇上人」<sup>26)</sup>はいずれも陳註がすでに引くものである。

註の機能・効用は多岐にわたるため一概には言えないが、『草堂詩餘』は陳註を参照し、時には誤りまで踏襲しているながら、その一方では有用な註を削除して無意味な註に置き換えたり、的はずれな語註を加えたりしている。元々ある有用な註を変更するのだから、そこには何らかの意図があつてしかるべきであろう。ところが、以上の例から推測できるように、『草堂詩餘』が差し替えや添加に用いる用例は、その多くが恐らく類書などからの借用で

あり、しかも文意の確認をしばしば怠っているがために、意図が不明なものとなってしまう。そのため、『草堂詩餘』の詞註を全体的に見た場合、首尾一貫した態度を見出しにくく、無定見に附されたものとの認識を持たざるを得ない。

『草堂詩餘』の註におけるもう一つの特徴は、歳時記や風土記の類がしばしば引かれることである。

○荆楚記「寒食挑菜。如今人春日生菜」(前集卷上／陸務観【水龍吟】)

○荆楚歲時記「立春日、悉剪綵為燕、以戴之。鄭毅夫云『漢殿闕簪双・綵燕、併知春色上釵頭』」(後集卷上／賀方回【臨江仙】)

○風土記「端午日、進角黍」(後集卷上／【喜遷鶯】)

○風俗通「箏秦声也。形如瑟」(前集卷上／【滿庭芳】)

○華陽風俗錄「烏有杜鵑者。其大如鵲而羽鳴。其声哀而吻有血。春至則鳴」(前集卷上／【憶王孫】)

○古今藝術「鞦韆北方戎戲。習以輕趨者」(前集卷上／【滿庭芳】)

このような書物からの引用は、陳註には極めて例外的にしか見いだせない。陳註の引用は、『詩経』や『楚辞』を始めとした古典的文献に見える作品がその圧倒的多数を占めるのであり、そのほかは『史記』や『漢書』といった史書や唐宋の筆記類の記述が散見されるに止まる。

中田氏は、『草堂詩餘』の註のうち、詩句の出処の多くが『文選』や唐宋詩詞であること、また故事に関する引用文献が多岐にわたることを指摘した上で、これら註の主な目的は「句の意味を明らかにするとともにその情緒を助ける」ことであるとし、適切な典故や用例がしばしば引かれなれないことについては「詞の鑑賞の方法の寛大さ」であると述べる。しかし以上のような状況を踏まえると、「鑑賞」を念頭に置いた註ではないと考えるべきではない

だろうか。

『草堂詩餘』の註は、ある語彙があつた場合それが他にどのような文献に見られるかを、歳時記等を含めた雑多な書物から引用しており、その語彙の正確な典故や適切な用例ということに頓着していない。つまり、『草堂詩餘』にとつて重要なのは一首の詞を解釈することではない。詞の文脈から切り離された語彙が、過去の有名な作品（杜甫や李白等）、或いは時代が近く人々に知られていたであろう作品（蘇軾や晏殊等）でどのように用いられているか、また時にはその語彙がどのような物語や習慣に基づくものかという知識なのである。このようにして附された註からは、作品全体を理解する視野は提供されず、語彙に関する断片的な知識が提供されるに過ぎない。『草堂詩餘』は、その意味で多分に類書的な詞選集なのである。

同様の性格は詞話からもうかがえる。『草堂詩餘』の詞話には、別にまとめられた書物からの丸ごと借用が非常に多いことは、中田氏がすでに指摘する通りである。

具体的に確認してみよう。

○『茗溪漁隱』云わく、「馬蹄難駐」、駐字を去字に作らば語意乃ち佳ろし。『古今詩話』… 悶字深く意義有り。鵲は本は喜声なれども、其の憑る無きが為に乃ち悶として之を弾つ。 (前集卷下／徐幹臣【二郎神】)

○『遯齋閑覽』張子野郎中、樂章を以て名を一時に擅にす。宋子京尚書、其の才を奇とし、先に往きて之に見ゆるに、將命の者を遣わして曰く「尚書は『雲破月來花弄影』郎中に見えんと欲す」と。子野屏後より呼びて曰く「紅杏枝頭春意鬧」尚書に非ざるを得んや」と。遂に出でて酒を置き飲を尽くす。蓋し二人の挙ぐる所は皆な其の警策なり。『古今詩話』亦た云わく、子野嘗て【天仙子】詞を作りて云わく、「雲破月來花弄影」と。士大夫多く之を称す。張初めて欧公に謁見するに、迎えて謂いて曰わく「好きかな『雲破月來花弄影』、恨む

らくは相見<sup>まみ</sup>ゆることの晩きを」と。

(前集卷上／宋子京【玉楼春】)

○『絶妙詞選』云わく、上苑にて初夏、公宴に待す。池上に双飛の新燕水を掠めて去る有り。旨を得て、之を賦す。

(前集卷下／曹純甫【阮郎歸】)

詞話が附された『草堂詩餘』に先行する詞選集として黄昇『花庵詞選』があり、それが『草堂詩餘』編纂の際に参照されていたことはすでに述べた。その明確な証明となるのが、「絶妙詞選」や「花庵詞客」の語として引用される詞話の存在で、その文章は文字の異同など一部を除いて黄昇の記述とほぼ一致している。<sup>⑤</sup>

また、『漁隱叢話』も『草堂詩餘』にとつて主要な詞話の引用源である。「茗溪漁隱云」「茗溪詩話」「漁隱叢話」等と標記された詞話が、『草堂詩餘』全体で二十五則以上を数える。それ以外でも『漁隱叢話』が引用する書物を、恐らくはそのままの形で借用していると考えられるものが多数ある。例えば、右の引用で第二番目に挙げた詞話に引用される二種類の書物は、『漁隱叢話』が全く同じ順番で載せる。『草堂詩餘』がそれぞれの書物から直接引用したというよりは、むしろ『漁隱叢話』から記述を借用したと考えるのが妥当であろう。なお、『漁隱叢話』自体が、同時代までの詩話書の博引によって成つており、その「博引」が『草堂詩餘』の性格と重なる点は注意に値する。詞話の内容は、その詞の制作背景や当時の評判といった、詞に関係する逸話がその多くを占める。それ以外では、蘇東坡【西江月】(前集卷上)や【洞仙歌】(前集卷下)のように作者の自序を引用したり、阮逸女【花心动】(前集卷上)のように作者に関する考察が引かれることもある。

注意すべきは、同じアンソロジーである『花庵詞選』が編者黄昇自身の評を詞話として附し、あるいは詞作者の自序や逸話を直接引くのに対して、『草堂詩餘』はほとんど全てが借用である、ということである。編者自身の言など『草堂詩餘』にはない、とさえ言えるかもしれない。ここにも『草堂詩餘』の「網羅して羅列する」という類

書的性格は端的にあらわれているのである。

#### 四、結語

『草堂詩餘』はその体例、収録作品、詞註、詞話、それぞれの観点から見ても「類書」な詞選集である。朱彝尊が指摘するように、詞選集としてみた場合、『樂府雅詞』の方が『草堂詩餘』よりはるかに重要な「雅」なる作品集であったに違いない。また、楊慎が「鄙俗・酸文の如きを選ぶ」といい、賀裳が「一つとして善き者無し」というように、『草堂詩餘』の収録作品は必ずしも理想的なものではなかったし、詞註や詞話も単なる寄せ集めに過ぎなかった。詞を「雅を以て尚し」とするのであれば、たしかに『草堂詩餘』は「廃すべき」詞選集であった。しかし、『草堂詩餘』は生き残った。それどころか、その「廃すべき」詞選集が他の「雅なる」詞選集をはるかに凌駕して流行した。そのことは、『草堂詩餘』の版本とそれに関わる言及の多さが物語るとおりである。

本稿は、項目を立てて分類し、註や詞話を集めて詞を羅列するという『草堂詩餘』の中に、類書性格を見てきた。「類書」が様々な事項を分類して羅列するのは、元来「引かれる」ことを目的とするものであったが、『草堂詩餘』がかりに「類書」な書物だったとすれば、それは誰によってどのように利用されていたのだろうか。そのことについては稿を改めて述べることにしたい。

〔附記〕

『草堂詩餘』の編者については、国立中央図書館現蔵の至正十一年双壁陳氏刊本に「建安古梅何士信君実編選」と刻されているという（筆者未見、趙万里『校輯宋金元人詞』引用書目参照）。また、『北京図書館古籍善本書目』は『草堂詩餘』について「宋・何士信輯」とする。この「何士信」が、『類編群英選前後集』『諸儒標題註疏小学集成』『類編古今事林群書一覽』といった類書の編者としてテキストに名前が見えることを、宮紀子『モンゴル時代の出版文化』（二〇〇六年、名古屋大学出版会）によつて最近知つた。宮氏によれば、『小学集成』等には「建安古梅何士信」と記述されるという。彼が、『草堂詩餘』の編者と目される「何士信」と同一人物であることは明らかであろうが、だとすれば、『草堂詩餘』や上に挙げた『類編群英選前後集』等の書籍が、いつどこで、どのように編纂されたかについて、再検討される必要があるだろう。

註

① 『草堂詩餘』の刊本数は中田勇次郎『読詞叢考』Ⅱ「詞集」三「草堂詩餘の版本」（創文社、東洋学叢書、一九九八年）所載の『草堂詩餘』刊本一覽』及び劉軍政「明代『草堂詩餘』批評論」（河南大学研究生硕士学位論文、二〇〇三年）に拠つた。それらによると、四十種類近くの版本が現存することが明らかになっている。また『樂府雅詞』及び『花庵詞選』などについては饒宗頤『詞集考』（中華書局、一九九二年）所載の版本数に拠つたが、それらの現存版本は最多でも十種類に満たない。

② 中田氏前掲書参照。また、『草堂詩餘』は日本にも早くから入つてきており、京都大学所蔵（狩野直喜博士旧蔵本）以外に、東洋文庫・内閣文庫や静嘉堂文庫などにも所蔵されている旨、村上哲見先生より御示教頂いた。

『草堂詩餘』の類書性格について

③ 『草堂詩餘』が最初にその名を記されるのは、宋・王楙『野客叢書』巻四である。『野客叢書』はその序文から寧宗期の成立と推定され、少なくともそのころには註の施された『草堂詩餘』が行われていたことが知られる。また、理宗期の陳振孫の書目『直齋書錄解題』に、『草堂詩餘』二巻及びそれに類似する選集があつたことが記されている。なお、『野客叢書』が『草堂詩餘』載張仲宗【滿江紅】詞」とする作品は、実は周邦彦の作である。しかもこの詞は、現存する『草堂詩餘』諸刊本のうち、元刊本など早い時期の刊本には収録されないが、却つて明・顧從敬『類編草堂詩餘』には正しく周邦彦の名を以て収録されている。

④ 京大学文学部所蔵(狩野博士旧蔵本) 至正三年刊本には前集に欠葉があり、また後集は別の刊本の合刻と考えられるなど、様々な問題が存在する。その次に早いのは元至正十一年双壁陳氏刊本だが、この刊本は旧北平圖書館所蔵(国立中央圖書館【台北】現蔵)とされており、残念ながら未見である。中田氏も、至正十一年刊本の情報については趙万里『校輯宋金元人詞』引用書目』に拠るといふ(前掲書参照)。また、嘉靖二十八年李謹輯刊本については、分類本ではあるがその作品の配列はその他の分類本系統の刊本とやや異なり、体裁も本文の後にまとめて詞註と詞話を付すという形を取る。しかし、収録される作品や詞註・詞話いずれもそれまでの諸本をほぼ踏襲している。

⑤ ただしこの刊本は後集巻上に三葉(黃昇【南郷子】から周美成【玉樓春】までの八首)の脱落がある。同じ刊本と考えられるものに『景刊宋金元明本詞』所収『増修箋註妙選羣英草堂詩餘』(洪武壬申(二十五年)孟夏遵正書堂新刊)の刊記あり)があり、そちらは脱葉がない。そのことからすれば、中田氏が前掲書の中で「最も完備」する洪武本というの、恐らく『景刊宋金元明本詞』所収本を指すであろう。なお、本文で述べた分類本の主な刊本三種間でそれぞれが収録する詞数を比較すると、洪武本は至正本より一首少なく(前集下末尾の柳耆卿【望梅】一首、『四部叢刊』所収本は洪武本に比べて三首(前集上末尾の周邦彦【瑞鶴仙】一首、謝無逸【江神子】一首、魯逸仲【惜餘春慢】一首、至正本に比べて四首(上記の三首のほか、洪武本と同じく【望梅】一首)少ない。

- ⑥ 洪武本には断句が施されていないため、格律は『欽定詞譜』を参照したが、註の挿入がある場合はその切れ目を優先した。
- ⑦ 『古今詞話』は佚書であり、『詞話叢編』は趙万里の輯本を収録する。
- ⑧ 「秦楼」は通常妓楼を指し、また「丁香」「豆蔻」はいずれも女性の比喻としてしばしば詩詞中で用いられる。
- ⑨ 『東京夢華録』巻二、『邵氏聞見録』巻三、『夢梁録』巻二十などを参照。その詞は【絳都春】一首を存するのみである。
- ⑩ 清・丁紹儀『聽秋声館詞話』巻七に【万年歡】【送入我門来】が引用される。また『全宋詞』は胡浩然の作とはしていないが、後集巻上が胡浩然の作として収録する【喜遷鶯】は、明・田汝成『西湖遊覽志餘』巻三がやはり胡浩然の作として引用する。
- ⑪ 『全宋詞』は【秋霽】を無名氏の作品として収録する。
- ⑫ 『全宋詞』は、范元卿の詞として『草堂詩餘』に収録される二首を録すが、その二首のうち『草堂詩餘』が誤って撰者を朱敦儒としている【念奴嬌】については、『宝真齋法書贊』巻二十七から収録したという。また劉巨濟は二首を存し、そのうちの一つは『漁隱叢話』後集巻三十七所引『復齋漫録』に見える。韓子蒼は【念奴嬌】の他に失調名二句が『輿地紀勝』から録され、劉方叔は分類本・分調本それぞれから一首ずつ収録されている。
- ⑬ 『花庵詞選』が『草堂詩餘』の編纂において参照されていることについては、中田氏前掲書に考察がある。なお、註③で言及したように、『草堂詩餘』という名の註付き詞選集は、南宋の寧宗期には存在していたと推定されるのだが、実はそれは淳祐九年の黄昇自序を持つ『花庵詞選』の成立より早い。ただし、この南宋本『草堂詩餘』が元以後の『草堂詩餘』と同じであったとは考えにくく、現に『野客叢書』が引く作品及び註は現存する元刊本には収録されない。また元刊本が『花庵詞選』を参照していることは、その詞話などから明白である。
- ⑭ 『統修四庫全書』本は前述のように後集巻上に三葉分の脱落があるため、その部分については『景刊宋金元明本詞』本で補って計数した。

⑮ 黄昇は『花庵詞選』の編者であり、『中興以来絶妙詞選』の自序に「卷末に自分の作品数十首を附しておく云々」と述べる。正確には彼の詞が選ばれているわけではない。

⑯ 南唐中主李景の作品を後主李煜の作品としたり、晏殊の作品を欧陽脩、朱熹の作品を張安国としているなど、『花庵詞選』中にも誤りは存在する。しかし、『草堂詩餘』に存在するテキストや作者の混乱に比べれば、微々たるものに過ぎない。

⑰ 【瑞龍吟】は『欽定詞譜』によると三段百三十三字、前兩段各六句三仄韻後一段十七句九仄韻。陳註が「吟牋賦筆」で前後二段に分段するのに対し、『草堂詩餘』は格律通り三段につくる。また『草堂詩餘』は、本文の後に『花庵詞選』の按語（その中で黄昇は二段ではなく三段が正しいと考証する）を詞話として附している。なお、原本では詞註と詞話は版本上双行の小字で表示されている。

⑱ 劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』九十九頁（中華書局、一九八八）。同書は明・汲古閣刊本を底本に、各種刊本を用いて校訂したものである。

⑲ 陳註は「悽悄」の後にこの詩句を附す。『草堂詩餘』はこの詩句が「嬋娟」の語註であることから移動させたのかもしれないが、このような例は他にはあまり見えない。

⑳ この詩の作者は謝靈運であるが、陳註は「謝玄暉詩」という。恐らく同姓による誤りであろう。『草堂詩餘』が何故「唐詩」として引用するのかよく分からない。

㉑ 宋・曾慥『類説』巻二十八「異聞集」所引「感異記」等にこの話が引かれている。ただし『類説』の記述と陳註の引用にはかなり異同がある。宋・葉庭珪『海録碎事』巻二「天部下」「七夕門」「織女斜河」の条が「聞異集」から引用する記述が、陳註に最も近い。

㉒ 『太平御覽』巻九百十五はこの記述を晋・陸翹「鄴中記」から収録するが、『淵鑑類函』巻三百四十七「樓二」は「幽冥録」か

ら同じ内容の記述を引く。

⑳ 孟郊詩は本来恋愛詩ではないが、この句だけを取り出せば、恋愛詩として受容されていた可能性も否定できない。

㉑ 「清暉」「聽西風」は陳註と『草堂詩餘』とは本文の文字に異同があり、陳註はそれぞれ「清暉」「聽秋風」につくる。この二つが削除されているのはそのためかもしれない。

㉒ 「衰草」の語は一句目にあることからすれば、『草堂詩餘』の註は本来「衰草」のすぐ下につくべきである。

㉓ 洪武本は「水亭小」までを前段とするが、『欽定詞譜』によると「驟雨鳴池沼」までが前段である。またこの詞は陳註と『草堂詩餘』の間に文字の異同がいくつかあるので、以下に列挙しておく。『草堂詩餘』「飛鳥」「簷花簾影」「醉臥」「夢柯」「依前」↓陳註「驚飛鳥」「簷花簾影」「困臥」「夢自」「依然」。なお、「飛鳥」はそのままで格律に合わないもので、陳註に従って訳をつけた。

㉔ 「五采羽名為葆」は宋・楊侃『兩漢博聞』巻九「葆車」の条にそのままの形で見える。しかしこれが引用であるかどうか判断しかねるため、ここではひとまず陳元龍の按語の一部とした。

㉕ 「簷花」の語を、陳註は「簾花」に作る。『漁隱叢話』の引く詞句が、陳註ではなく『草堂詩餘』と同じであることにも注意すべきであろう。

㉖ 敏率万餘人将与卓戰。未獲濟，采以白羽扇麾之，敏衆潰散。（『晋書』巻百「陳敏伝」）

㉗ 陳註はこの後に、『蜀志』と陶潜の語及び李賀詩を引用する。

㉘ 謝中郎是王藍田女婿。嘗着白綸巾肩輿徑至揚州聽事。（『世說新語』「簡傲」）

㉙ 『晋書』巻九十四「隱逸伝・陶潜」に「嘗言夏月虚閑，高臥北窓之下，清風颯至，自謂羲皇上人」とあり、また『漁隱叢話』前集巻三「陶淵明集云」条には「為彭沢令在官八十餘日，即解印綬賦歸去來兮辞」とある。『草堂詩餘』の註はこれを併せた形になっている。なお、陳註が引くのは『晋書』の記述のみである。

③ この二種以外に「花庵詞」「玉林詞選云」「玉林詞話」等の標記が用いられることがあるが、いずれにしても黄昇の著書著述を襲用していることに変わりはない。

④ 「按」「愚按」と標記された詞話も見られるが、数は極めて少ない上に、後集巻下に集中しており、それらが「按」「愚按」を含めての引用であるか否かを確認できる資料は、今のところ無い。